

第3章

前進する医学専門学校時代

——充実する基礎医学施設



医学専門学校の誕生	91
療病院が学校附属に	94
狭い敷地内での建築ラッシュ	96
日露戦役と本校	101
職員の公費海外留学始まる	101
卒業生から初めて医学博士生まれる	104
発展のあと二駒	
創立三十周年記念式典と建築落成式	107
大正3年の教諭陣大改革	112
第一次世界大戦の波紋	118
やっと教諭が教授に	121
医専の歴史の象徴，島村博士寿像	123

医学専門学校の誕生

日清、日露の両戦役を挿んで世紀が変わる。大仰にいつて、この世紀の変わり目を礎^{いし}に^し、日清、日露の両戦役を試練のふみ台にして、日本が近代国家に脱皮してゆくとすれば、この時期はまた、そのまま本校の苦難と躍進の時期にあてはまる。思えば、去る1887年(明治20年)9月勅令48号によって府県立医学校の費用を地方税により支弁することが禁じられ(この勅令の意図は財政乏しき府県の経営では医学教育は不完全たらざるをえず、各府県には専ら普通教育の普及に尽力させ、医学教育は完備せる官立医学校をもって当てるにあった)、15校の公立医学校が廃校の憂目を見たとき、本校が大阪、愛知と共に存続しえたのは、大都市に位し、他に對抗者なく、療病院・医学校の収益でもって独立維持経営しえたからであった。

この本校に再度の痛撃が下ったのは、1899年(明治32年)京都帝国大学医科大学の創設である。校友会雑誌創立三十年記念号に載った沿革略史によれば「我旗主たる猪子校長を始め旗下の秀才の悉く彼に抜去せられ撃破傾倒の我孤城は僅に其残党のみを以て死守決戦せざるべからざるの秋となり而かも敵は強敵なり我に何等の策あるなし。嗚乎此時に於ける我校の運命は孤城落日の様なりき。茲に於て三十三年の府会は我校の悲運に同情するなく反て將に廃校の一大鉄鎚を其頭上に下さんとせり当時の校長島村氏が心緒如何なりしぞ。遺恨血涙を飲て切齒振腕す今想ふて尚涙あり」と。人材の大部分を引きぬかれ、かつこの強敵を受けては、病院収入のみで独立経営せねばならぬ本校の存亡は孤城落日と見えたのも尤もであろう。当事者も市内に二個の医学教育機関をもつことに疑問を提したのも当然の成行きである。口さがない府会議員の中には「相撲ニ例エテミルト常陸山ト小緑(関西相撲の十両力士)ノ取組ミ」と府会の席で高言するに至る有様。幸い校長始め職員学生の愛校の赤心と種々の奔走尽力によって、「維新以来府民が維持し来れる院校にて全国の模範なるを大学に渡さんよりはむしろ府の力で維持する方然るべき」との意見が大勢を決し、難局を辛うじて切りぬけはしたものの、その前途は決して明るいものではなかった。32年7月開講し、10月内外科のみで診療を開始した京大病院も35年までには着々と態勢を整え、全科そろって入院診療も始まるに至っては、予算案でも外来患者2割減、入院患者またよく見積って5分減を覚悟せねばならなかった。1903年(明治36年)に公布された専門学校令は、単に名称の変更を意味するだけでなく、断崖の淵より這い出さんとする本校に、制度の上での明確な根拠を与え、官立医学専門学校と対等の地位を約束するものとして、その前途に大いなる曙光をあててくれるものであった。

これまでの教育制度において、専門教育に対する統一の方策は立てられておらず、専門学



河原町通りに面した生徒通用門 (1909年・明治42年)

勅令48号以来は、医学に関する専門教育は原則として官立医学校に依拠するほかなかった。明治19年の「中学校令」で高等中学校の一分科として設置された医学部が明治34年夫々独立し、5つの官立専門学校（第1 高等中学校医学部→千葉医学専門学校、第2→仙台、第3→岡山、第4→金沢、第5→長崎）となり、医学教育に一つの体制ができ上りつつあったが、中等教育が発達して専門学校への進学志望者が増大するにつれ、高等教育機関を整備する必要が生じ、専門学校の統一的制度規定として生まれたのがこの専門学校令である。既設の官立専門学校はこの専門学校令で規定されたが、公私立校には同月31日公布の文部省令「公私立専門学校規定」に基づき文部大臣が認可することとなり、同時に「専門学校入学者検定規程」が出る。これによって、官公私立は対等の資格を法律によって保障されることになるが、その特典に伴う条件はなかなかきびしかった。教授陣容や設備の上では勿論のこと、学生の入学資格が重視され、正当な基礎と正当な水準の上に専門教育を築きあげようとする。専門学校令発布にまつわる一つのエピソードは、従来医術開業試験受験者の準備教育を授け数千人の学生を擁しその大を誇っていた東京の済生学舎の廃校である。法規の要求する設備教授陣を整えるに要する多大な経費に窮し、入学資格がやかましいとなれば学生の大部分を失うに至るからであり、かといってこのままでは一個の各種学校に低下する屈辱に甘んじねばならぬというジレンマからであった。この専門学校令によって設置を認められた医学専門学校は、前記官立5校のほかは、大阪、京都、愛知の公立3校、私立で東京慈恵会医院医学校、一年おけて私立熊本医学校の計10校にすぎない。

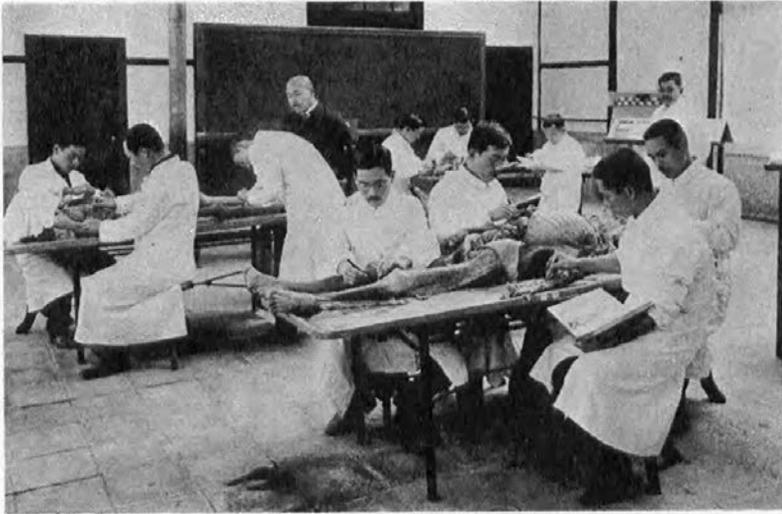
こうして本校も専門学校令公布されるや同年6月20日文部大臣の認可を得、京都府立医学

専門学校と改称し、新発足することになるが、これは京都帝国大学医科大学設置の際の悲運がむしろ地固まるための雨の役を果たし、鴨川を挿んだ対岸の大学を常に意識しつつ専門教育に独自の道をめざして努力してきたここ数年の苦勞の甲斐あってこそで、他の二公立医学校に先んじて認可をえたのもそのせいだともいえよう。(愛知県立医学校の認可は7月18日、大阪府立医学校のそれは9月12日)。

療病院が学校附属に

当時の校友会誌やその他の記録をみると、この専門学校誕生は単なる校名の変更だけのごとく至極簡単にしか扱われていないのが不思議なくらいである。予算面でさし当り何の追加変更があったわけでもなく、府会議事録にも何の記録も残っていない。あるいは本校の伝統とその内容がすでに十分専門学校令の規定に適っていることとて当然のことと受け取られたのかもしれない。もしそうだとすれば思い上りも甚だしいのだが。変わったことといえば、勅令66号、67号で公立専門学校職員の俸給並びに待遇官等が大幅に引上げられたこと、つまり従来奏任官またはそれと同一待遇とされ、本校では奏任待遇が島村、工藤、永井の三教諭にすぎなかったが、改正後はすべての教諭が奏任文官となり官等も引上げられて、上記三名以外の七名の教諭も奏任に進んだことであろうか。しかし専門学校になったことは本校の将来にとって内的外的に大きな変革を意味するものを含んでいた。それは、この時始めて療病院が学校の附属施設となったことである。

栗田口療病院で医学生教育を始めて以来、医学校はつねに病院附属であり、当初、医学生は療病院生徒と呼ばれ、教師も京都療病院教師であった。1879年(明治12年)本院内に医学校および医学予科校を設置し学校の体裁を整えてみても、2年後、一応療病院の管理下にあった医学校を病院から分離して、独立した形にしてみても、本質的にはその性格は変わっていない。その証拠に後々まで一般には本校は相変わらず京都府療病院医学校と呼称されていた。このことは適塾から発展した大阪医学校、名古屋藩医学所から発展した愛知医学校はもとより、他のすべての医専が医師養成の学校を主体に、それを核に病院を附属せしめたのとは本質的に性格を異にしていた。つまり、本校ではこれまで患者の治療を本務とする病院があって、その収入も殆んど病院にいて学校は度外視され、悪くいえばその片手間に医学生を教育していたといえるふしさえあった。基礎医学の軽視もそのひとつで、解剖室の如きは12坪の所で100人以上の生徒を教育していたし、明治31年本校の病理学助教諭となり、病理学教室を創設した角田隆の回想によれば「書物一冊、プレバラー一つなく、唯小さな部屋が一つ二つあるだけで、書物を買ってくれといっても、校長は『そんなもの要らないのでなあ』と



ひろくなった解剖実習室 (1912年・明治45年)

いわれる……」(本校80年史より)とあるが、ここにもその一端がうかがえよう。開校以来30年間のこの体制がいま法的に逆転することになり、研究と教育を旨とする学校があくまで主体とされ、病院はその附属として従の位置になるわけで、今後は自らその面目を改めざるをえない。しかし独特の発展をとげてきた本校にとって、この制度上の変化をすぐ具体化することはなかなかできることではない。後年明治42年、卒業生に医学士の称号を与えることになった際、基礎医学の研究十分なる所より選定する方針の文部省は、応用的学術の方面に比し、本校が基礎医学の面に多少遜色ありと難色を示し、学校は営利的病院と異なり学術研鑽を主とすべしと注意を与えているのをみても、在来の方針は一朝にして改善できぬことがわかる。京都大学と比較するのは酷だとしても右表の解剖体数からも本校の遅れが示されていよう。当初、予算にも具体的体制にもさしたる変化なく、名称のみの改変と受けとられたのも無理はない。しかし、鴨川の対岸で京都大学は着々と態勢を整え、かつての同僚たちの活躍を望見するにつけ、この制度上の改

解剖体統計		参考	
開院以来通計		京都医科大学	
明治32年	48		
33	39		
34	33		
35	43		
36	68		
37	67		
38	47		
39	55	768	明治39年 265 1400
40	51		42年 320 2200
41	46		大正2年 435 3000
42	66	931	
43	72		京大では15年間に3000体
44	73		本校では同じ15年間に904体
大正元年	77		学用患者死体は例年100乃至180あるも半数は京大へ回している。
2	119	1272	
3	99		

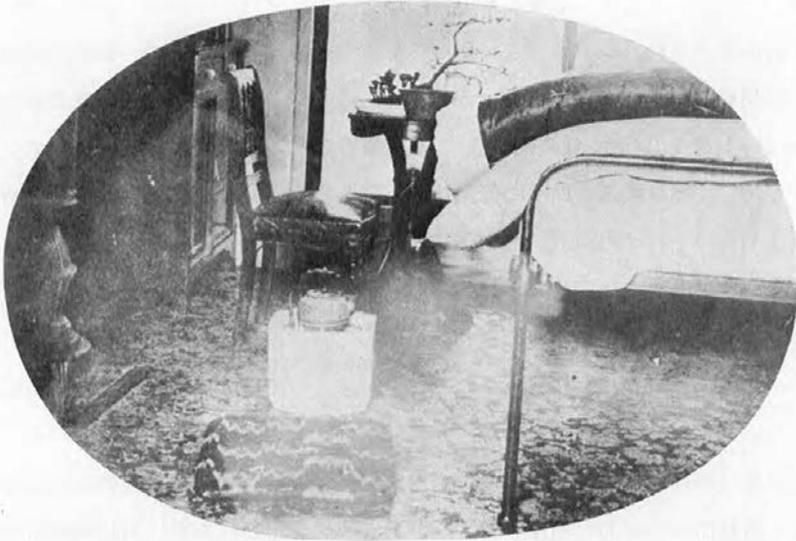
革は本校の内実を徐々にではあれ、変えてゆかずにはおかない。本校に質的に飛躍的な発展を強いたのは、この専門学校の誕生であったはずである。

狭い敷地内での建築ラッシュ

明治38年度予算を議する府議会では、病院のみをみて学校を顧みなかった理事者のこれまでの怠慢が責められたのも、専門学校誕生後の目にみえる情勢の変化の一つである。日露戦役の急迫する時局の中で不急の工事が中止され延期されていたにも拘らず（第五中学校の設立延期、農林学校増築中止など）、4カ年の継続事業として16万円を費しての大々的新改築案が練られ、30名余対4で可決される。こうした新建築案が提出されることになる背景には、専門学校になってからの病院収入の着実なる伸びがある。京都大学創設時になされた心配が杞憂に帰しているさまは、次の歳入歳出の推移からもみてとれよう。この辺の事情がどうなっていたのか、いささか不思議に思っただけで当時の状況を種々調べてみると、およそ次のようなことであったらしい。世人が病院の効用を認識してきたという一般的風潮ももちろんあるだろうが、明治の官尊民卑の風潮いまだ強く、官立医科大学の冷たい権威主義がとかくの風評をよび、かえって療病院の親切な対応が目立ったことである。明治37年医科大学病院長の訓示に「言葉遣町疇にして同等以上の人に対する語を用ふべし、『其方』、『そち』、『きさま』等の語を用ふるの習慣を廃し、氏名を用ふる時は『さん』付とすべし、呼びかくるに『こら』『おい』などといはず『もしもし』を用ふべし、『そこ退け』の如き我雑な言葉を慎しむべし……」（京都医事衛生誌第119号）。院長がこと改まってこのような訓示をする所をみると、御役所風は万事に相当なものだったのだろう。また京大病院は新米患者を1日60名を限り抽

病院実収入		建築費 積立金	を除く支出	純益
明治32年	116,500			
33	132,200	110,300	21,900	
34	110,000	91,900	10,100	
35	107,900	101,100	6,800	
36	103,000	92,700	10,300	
37	102,000	91,000	11,000	
38	139,000	119,400	29,600	
39	154,100	124,400	28,700	
40	164,200	128,800	35,400	
41	189,000	150,900	38,100	
42	200,400	171,400	29,000	
43	223,400	179,900	43,500	

籤でこれを診る。抽籤に洩れればやむなく付近の宿屋で空しく滞在する。これを奇貨とし宿屋の下男下女同院につめかけ抽籤した番号を客に高価で売りつけるとか、口実をもうけて長らく滞在させる宿屋もあったという。余談だが、京大病院の前には旅館が軒を並べているのに対し、府立病院前にはこれがないのも、こんな所に理由があったのかもしれない。夏冬の休暇中、京大病院では軽症患者に退院を命じ、急患



特等病室内部 (1911年・明治44年頃)

と産婦を除いて一般の診療も謝絶、重症患者のみ助手にまかせていたともいう。これに対し本院では下表からも知れるように暑中も「入院患者多きにより各部長医員、暑中廃休の姿」と、かえって京大の処置のおかげで休暇中は大繁昌となれば、本院の存在意義は大学病院の出現でも決して脅かされなかったわけである。もっともこのために本院が払った努力は大変なもので、

合計	院入		一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	計
	学用	通常										
四、四六四、九〇五、三七六、〇五七、四八六、八七二、七三三、四七三	七	五五	三、四七三、〇〇〇、三九六、四七一、五〇七、五二四、五七九、六〇六、三九五、四一八、四〇四	三、四三三、〇〇〇								
七	五五	三、四三三、〇〇〇	三、四三三、〇〇〇	三、四三三、〇〇〇	三、四三三、〇〇〇	三、四三三、〇〇〇	三、四三三、〇〇〇	三、四三三、〇〇〇	三、四三三、〇〇〇	三、四三三、〇〇〇	三、四三三、〇〇〇	三、四三三、〇〇〇

京都医事保険誌第七号 (明治三十八年十月)

医大	明治38年11月9日		明治38年11月13日療病院	
	官費	私費	官費	私費
入院				
内 科	48	29	} 22	66
外 科	36	18		19
眼 科	24	7		1
産婦人科	20	17		11
小児科	9	3		
皮膚科	15	9	} 0	
耳鼻咽喉科	15	7		
伝染病観察室	15	7		
			精神科	90
計	175	133	22	187
	308		209	
外来	174	392	0	182
	572		182	

(共に日出新聞より)

患者の便宜をはかって一人でも多く来てもらいたいと、サービスの一つに明治38年4月には配達夫3名を雇い入れ、急を要しない薬剤の無料宅送まで行なう有様。薬局で薬を貰うまでに大層な時間がかかって気の毒だというわけである。42年6月には特等病室2室を設け和洋食随意入院料1日4円(治療費薬価は別)と高級私費患者の受入れにも意をつくす。サービス精神はともかく、当時医員や助手の俸給13円、巡査の平均月収15円15銭、下男の給与月平均5円75銭、下女のそれ3円38銭、白米1升16~7銭の時代というから特等病室の贅沢さが知れる。また前ページ右表に明治38年11月のある1日の両病院入院外来患者の表をあげたが、これを見比べると、大学病院が研究教育を主として特に入院患者では官費のものが過半をしめていて、大学では研究材料にされかねまじと、かえって府立病院の声価を高めた様相もうかがえよう。世評にいう「外来は大学、入院は府立」もここに表われているようか。またこの表で特に目立つのは、精神科が京大にまだ出来ていなかったことが本邦初の公立精神病院という伝統と島村部長の尽力と相俟って本院の患者の半数を受けもち、本院の柱になっていることである。

96ページの収支表にもみてとれるように、上記のような理由から38年度よりは年々の純益は2万円を下らぬ見通しが立ったのだろう、先述の4カ年継続事業が始められ、具体化するにつれ計画はふくれ上り、追加予算計上、継続事業延長と、延々十年にわたり、総計39万余円を費して行なわれることになる。下表を見てまず気づくことは、最初の数年に解剖学、組織学、生理学、衛生学、医化学など基礎医学教室の充実に重点がおかれていることで、病

専門学校令発布以来の建築ラッシュ

1904年(明治37年)	3,278円765	伝染病室患者休憩所新築 〔4ヶ年継続事業初年〕
1905年(明治38年)	19,428.—	解剖実習室(91坪)、組織学実習室(90坪)、生徒室教室及図書室(85坪)など415.5坪新築
	追加 15,394.—	汽罐室及発電所建築など。〔北米合衆国ゼネラル電気会社製、15キロワット発電機(3,268円)ほか〕
1906年(明治39年)	14,384.—	生理学実習室(60坪)、生理学教室及実験室2階建(延100坪)、衛生学教室及実験室(35坪)、産室及附属室(30坪)など345.85坪新築
	追加 13,343.50	階段教室(70.2坪)、学用患者室及看病婦室(35坪)、細菌検査室増築(9坪)など139坪
1907年(明治40年)	60,000.—	細菌実習室(35坪)、医化学実習室(54坪)、動物飼養場(30坪)、外科小手術室(88坪)、大手術室(30坪)、疑似伝染病室(62坪)、南三等病室(62.5坪)、三等婦人病室(35坪)、三等及四等病室(62.5坪)、学用病室(35坪)、雑居病室(69坪)など697.5坪新築
1908年(明治41年)	59,300.—	診療所及事務室(216坪)、薬局室(123.5坪)、臨床講義室(34.5坪)、精神病患者回復室(60坪)、二、三等病室(90.75坪)、伝染病室(36坪)など759.25坪新改築

38年度以降10ケ年に新改築せる建物坪数3,694坪3合(内二階建1,048坪8合)これに在来の建物1,068坪1合を合すと計4,762坪4合、工費予算399,231.50円

一 構造ノ大要 書庫及汽罐室、発電所ハ煉瓦造ニシテ、其他ハ概ネ木造トス、屋根ハ瓦ヲ主トシ、「スレート」及金属板ヲ用ヒ、葺立テ壁ハ内外共漆喰塗り、天井モ亦漆喰塗りトシ、一部ノ室ニハ、板張若シクハ打出模樣付、鋼鉄板張り「ペンキ」塗りトス、床ハ治療室等ノ土間ハ、人造石磨出シ、其他ハ板張トシ、廊下通りハ米松ヲ用ヒ、又特等並ニ一二等病室、其他主ナル室ニハ「リノリウム」ヲ敷キ詰メ、造作及建具類ノ木部見エ掛リハ何レモ「ペンキ」及「ワニス」塗りトス。

避雷針 講堂及病舎各棟ニ一ヶ所乃至三ヶ所宛建設シ、孰レモ試験ヲ遂ゲ電氣抵抗「オーム」以下ニナセリ

電燈 自営ニシテ、原動力ハ送汽用汽罐ヲ併用シ、發電機ハ米國製十五「キロワット」及十「キロワット」ノ二台ヲ据付ケ、燭光及燈數ハ每室ノ大小ニヨリ之ヲ按配セリ、而シテ「レントゲン」及電氣浴、其他ノ治療用電氣ハ此ノ電流ヲ利用シ、蓄電室ヨリ供電セシムル装置ニナセリ。

給水、送汽 給水ハ地上三十ヨリ揚水ニ水槽ヲ設置シ汽力唧筒ヨリ湯水セシメ夫レヨリ鉄管ヲ通ジテ要所ニ給水シ、送汽ハ三十馬力「コルニシ」形汽罐ニ台ヲ据付ケ、交互ニ運転セシメ、之ヨリ汽管ヲ分岐シ、各要所ニ導キ、一ハ暖房ニ供シ、他ハ用途ニヨリ自由ニ供給シ得ル装置トス。

以上本建築ノ概要ヲ記スルニ臨ミ、起工以來専ラ設計並ニ監督ニ從事シタル掛員ハ京都府技師一井九平同技手郡嘉平等ナリ (啓生記)

建築費支出決算

明治36年	0	明治43年	55,262,420
37	4,083,455	44	44,852,000
38	33,705,458	45	?
39	29,167,018	大正2	21,729,000
40	45,791,230	3	11,799,000
41	44,403,760	4	0
42	38,445,200		

(府会議事録予算書より)

[繼續事業2ケ年延長]

- 1909年(明治42年) 36,595.一 講堂(72坪)、標本室(48坪)など新築151坪と一、二等病室、精神病室、二、三等病室修理(696坪)
- 追加 29,605 標本室(48坪)、動物飼養室(15坪)、外科小手術室(88坪)、など新築193.5坪及び一、二等病室修理189坪
- 1910年(明治43年) 45,043 外科研究室及診察室(72坪)、診察室及宿直室(74.75坪)、三四等病室(75坪)など新築229.25坪および北隣旧飛鳥井家其他の土地596.18坪の購入

[事業延長]

- 1911年(明治44年) 50,103 内科婦人科診察室(140坪)、婦人科治療室(62.5坪)、動物室(40.5坪)標本製造室(20坪)、患者静養室(28坪)など新築439坪
- 1912年(明治45年) 36,670 神経科電氣治療室(64.86坪)、薬湯、電氣浴室(25坪)、病理組織実習室(69.75坪)、など200.11坪
- 1913年(大正2年) } 54,398.25
 1914年(大正3年) } 2等病室の増築其他精神病室伝染病室(40坪)の新改築病舎17棟 病床数261、特等2、1等25、2等70、3等88、伝染病舎2棟 1、2等合せて15室、3等11室、211名収容可精神病舎2棟 男女合せて50名収容



雑然たる校院舎 (1918年・大正7年頃)

院中心のこれまでの本校が、その面目を一新して行く様うかがえる。基礎医学教室の整備が一段落する40年以降は、病院収入の増加にも勢をえて、病院診察室と入院病舎の新築改造が精力的になされ、4カ年計画は6カ年計画に更に10カ年に拡大、それに伴って患者数も増えれば収入も増え、医専・療病院の経済的基盤が確立されて行く。

当時1911年(明治44年)、岡山医専の4年生が本校及び附属病院を参観した時の感想が校友会誌にのっているが、「細菌教室及実習室の立派なること、病理の標本の豊富なること、医化学実習室の特設あること、精神病室の偉大なること、最後に一般外来患者の予診が羨望の至り」とある。由来一般外来患者の予診は帝大を除いてはただ本校のみであるといわれ、実地教育の伝統は昔ながらに、基礎教室の充実も外来者の眼を奪うレベルまで達していたようだ。

こうして客観的には着々と地歩を高めつつあったとはいえ、内部に問題がなかったわけではない。収益をふやすために私費患者の受け入れに力をいれすぎ、「学用患者数ハ頗ル過少ニシテ最近二年間ニオケル実数ハ遙カニ私立医専指定規則中ニ定ムル最少限ニモ及バザルノ嫌有之、相当増員ヲ必要ト被存候」と文部省よりおこごとをうけているのもそのひとつなら(明治39年10月11日府庁文書より)、校友会誌に載った学生の戯言に、「校内で一番長いのが病院の建築、小さいのが学生の胆っ玉、……見っともないのが校庭の古材木と運動場、八釜しいのが産婆の下駄、不潔なのが病院の外来患者の食堂……」とあるように広くもない敷地内で「マッチ箱を壊しては建て、壊しては建て、而も隙間なく建て並べる」工事が延々といつ果るともなく続くとすれば、「訪う度毎に各診察場が所を換え、昨の眼科は今の内科、宛然魔宮に入りたり」の嘆息もむべなるかな。当時大阪でも愛知でも院校の拡充が精力的に行なわれているが、新しい敷地1万8千坪(本校の2倍)を確保し、工費69万2千円で総建坪8,800坪(これも約2倍)を4年間で建てた愛知、5カ年計画で65万円の工費で病院だけで6,500坪の大阪に比べると、本校は狭い敷地内での10カ年に亘るつぎはぎ細工。校長以下当事者の苦勞のほどがしのばれよう。

日露戦役と本校

専門学校時代前半の大きな国内的事件といえば日露戦役であるが、この戦役の本校に及ぼした影響を見ると、38年10月校長島村俊一、教諭望月惇一、工藤外三郎の三名が毎週日曜日、大阪陸軍予備病院に陸軍衛生部補助員として出張、戦傷者の診察に従事したこと、助教諭常岡良三、中村登、竹岡友信他多数の医員が応召、軍医として従軍したこと、卒業生の多くが軍医として活躍したこと（本校卒業生のうち戦後叙勲で金鷄功4乃至5級を受けたもの35名、旭日3～6等135名、瑞宝4～6等31名、賜金27名、戦病死4名、上記三助教諭は共に旭日六等、常岡は年金300円、中村、



島村 俊一

竹岡は一時賜金400円を賜う)、陸軍依託生を多数養成したことが特筆できるのみで、医学校という特殊な領域では国をあげての戦役の影響も想像以上に影が薄い。時局に鑑み府県税の節約が説かれ、戦時予算節減審議で既決の府一般会計予算142万円で18万7000円余削減され、不急の工事が延期乃至中止されたなかに、特別会計であったとはいえ、38年度には3万3000余円の巨額で新改築に着手してさえている。

陸軍依託生についていえば、明治38年度は総計81名が各医大医専に割当てられたが、医大29名、医専52名の内訳は東大12、京大9、福岡8、千葉9、仙台7、岡山3、金沢3、長崎2、大阪2、愛知2、京都18名。本校の異常な数は目をひく。在学生通算でも医大60、医専95、合計155名中本校だけで36名。全体の四分の一を受けもっていた。明治41年にはこれが更に49名にも昇っている。「京都府立医専出身の軍医は至極好評にて、殊に第4師団(大阪)の如きは最も信頼を之に置きおれり、蓋し平生教授上重きを実地に置きて学用患者を豊富にし孜々其陶冶に努めつつある結果たるべし」(京医保誌)とは、いささかこそばゆい形で、日露戦役は本校の名声をあげたものではある。

職員の公費海外留学始まる

医専になってもう一つ大きな研究体制上の進歩は職員海外留学規定である。これまでの本校の職員にして海外留学を志す場合、余程のつと幸運で文部省留学生に採用される以外は(明治31年教諭浅山郁次郎、32年教諭平井敏太郎の二名があるが、共に京都医科大学転出の準備留学の色彩が濃い)、私費によるほかに、その際には既述の笠原光興教諭のように一旦

退職せねばならず、余程の覚悟もいることであり、研究上の支障にさえなっていた。明治37年4月職員海外留学規定が定められ、ここに初めて公費による留学が制度として実現したことは大きな進歩といえる。この制度が生まれるいきさつは、考えてみれば、結局は京都大学に対抗して病院を繁昌させねばという苦肉の策といえるふしがある。府会議事録によれば「良イ職員ヲ入レテ充分ニ手腕ヲ振ハセ、其代リニ外国へ留学サセルトイフヨウニスレバ、良イ人モ来テクレ患者モ増エ……」とか「病院ノ仕事ハ医師ノ手腕ニヨル。将来有望ノ人ニ来テモラッテ手腕ヲ振ッテモラウ、神妙ニ奉職シテイル人ハ他日残余金カラ積立シテ海外ニ留学サセ、帰朝ノ上ハ又コノ療病院ニオイトテ2~3年ノ義務年限ヲ付シテ働イテモラフ……」とあるのをみると、理事者側の意向は専ら病院収入増大の一つの手だてと考えているようだが、その発想はどのようであれ、これが結果的に本校の発展に大きなプラスになってゆくのは否めない。ここでも京大を向うにまわしての病院存続の痛ましい努力が好結果を生む試験になっているのを知る。苦しいやりくりの中から35年度予算案で歳出入の差引金2,982円50銭を積立てることにしたのが最初で(決算では残余金少なくとも465円96銭しか積立てられなかったが)、36年度から残余金が生まれた場合3,000円を限度に積立て、2年間1人宛順次留学させるルールが敷かれる。37年4月予定通り積立てもできて、留学規定が制定され、同年7月教諭池田廉一郎が外科学研究のため2年間のドイツ留学を命ぜられたのが本校における公費海外留学のはじまりとなる。その後の留学生は次ページの表の通り。

43年度から積立金を6,000円に倍増、隔年2名ずつ派遣しうるように改められているのは療

職員留学資金歳入歳出決算 (銭未満4捨5入)		
	当年度積立	歳出
明治36年	466	0
37	3,000	2,064
38	3,000	1,800
39	3,000	3,672
40	3,000	1,800
41	3,000	4,197
42	3,000	1,800
43	6,000	5,609
44	6,000	3,600
45	6,000	5,820
大正2	6,000	8,969
3	0	4,386
4	0	0
5	0	0
6	6,000	199
7	6,000	3,069
8	6,000	2,333

誓 言

京都府立医学専門学校教諭池田廉一郎儀今般独逸國へ滿二ヶ年間留学ヲ命セラレ候ニ付御指定ノ学科ヲ研究シ誓テ勉学御趣旨ニ副ハシテ期ス尚左ノ条項ヲ堅守履行可致候

一 留學中ハ品行方正ナルハ勿論日本人タルノ面目ヲ保ツル自己便宜ノ為半途帰朝セザルヲ但疾病ニ因ラズ帰朝ヲ請ヒタル場合ニハ学費及旅費ノ全部ヲ返納ス

一 帰朝ノ後滿四ヶ年間ハ京都府立医学専門学校又ハ御指定ノ所ニ從事ス

一 御命令ニ背キ又ハ不都合ノ行為アルカ其他疾病ニ因ラズシテ留学ヲ免セラレタル時ハ学費及旅費ノ全部ヲ返納スルヲ

右誓約ス若シ本人ノ義務ヲ果サザル時ハ保証人ニ於テ總テノ義務ヲ果シ御指示ニ従テ必ス履行可仕候依而保証人連署ヲ以テ誓書差出候也

明治卅七年七月十九日

京都府立医学専門学校教諭

本人 池田廉一郎 印

同上 保証人 望月 惇一

同上 保証人 島村 俊一

京都府知事 大森鐘一 殿

病院収入の増大による。なおこの間、1908年(明治41年)7月からは留学規定を改正し、職員のうち自費留学生にも学費を補助できることとし、在ミュンヘンの井上助教諭に手当金500円が支出されている。因に当時明治40年頃本校出身者の海外留学生を列举してみると、ミュンヘンに井上喜久治(本校助教諭、明治35年卒)のほか三好慶輔(陸軍一等軍医、30年卒)、吉村文庭(開業医)、ベルリンに鈴木喜助(開業医、37年卒)、太田為治(陸軍一等軍医、31年卒)、マールブルクに新宮涼男(陸軍一等軍医、30年卒)、ヴェルツブルクに岡田盛吉(陸軍一等軍医、28年卒)、ブレスラウに尾見薫(台湾総督府医学校助教諭、30年卒)、ゲッチンゲンに山本忠孝(開業医、29年卒)、教諭工藤外三郎、精神科医員谷口伊之助も滞独。また大正2年11月望月校長外遊の際ミュンヘンにて本校同窓生集い一夕を共にした際、大野正恭、唐沢準吉、福井庄平、武田元一郎、森本誠の5氏が列席したと聞き「盛なる哉、ミュンヘンは京医専卒業生を以て満さるるの期や近きにあらむ、痛快々々」と快気焰をあげる様が校友会誌にみえる。これはいささか手前みその自説であるとしても、12年前の明治34年本校卒業生中、初めて留学した馬杉篤彦氏がかの地より便りを寄こし「卒業生中海外ニ留学セルハ小生ガ率先者カト存ジ候、之レニ反シ学歴ヲ均ウスル高等中学医学部其他坂愛ノ医学校ヨリ来ル人其数実ニ浅少ニアラサルナリ、爰ニ於テカ小生ハ常ニ京都医学校卒業生諸君ノ多クハハイハイナル程主義デ金儲ケニ如オナク立廻ラレ海外留学ナンカ思ヒ当ラサル程ニ暇ノナイ様ニ世ノ中ニ持テルカト思ヘバ聊カ京都府医学校卒業生万歳ト絶叫セサルベカラザルモノアリ…」と書いた時からすれば、本校の雰囲気もまた格段に変わってきたというべきか。もっとも大正10年までの専門学校時代に、職員のみについていえば大阪高等医学校では34名、愛知医専では20名が留学しているのに本校では私費も含めて別表の如く13名とはいささか淋しい気

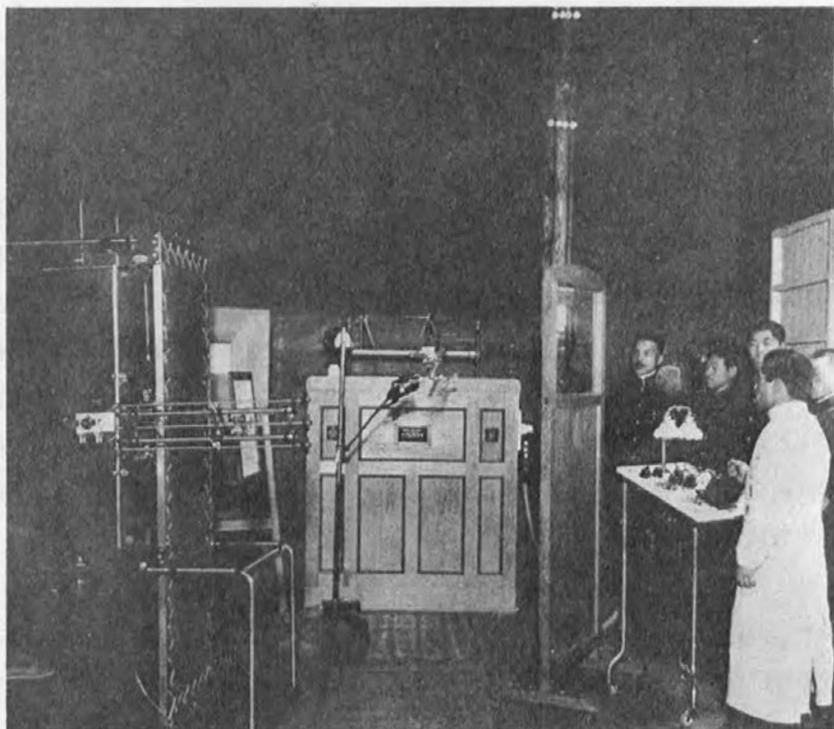
職員 の 留 学

職名	氏名	留学先	出発	帰学
教諭	池田廉一郎	ドイツ	明治37.7	40.1
"	工藤外三郎	"	39.8	41.12
助教諭	井上喜久治(私費)	"	40.4	42.9
"	角田 隆	"	41.7	43.10
"	伊藤 元春	"	43.4	大正元10
"	佐武安太郎	"	43.11	3.3
"	本庄謙三郎	"	45.5	3.11
"	秋元隆次郎(私費)	"	大正元10	2.11
"	常岡 良三	"	元10	4.1
校長	望月 惇一	英仏瑞西 欧州各国	2.4	3.2
教授	野田 浦鋸	アメリカ	6.12	9.12
"	河村 叶一	欧米各国	7.4	8.6
"	中村 登	"	10.7	12.2

学 事 報 告 書

明治卅七年九月伯林ニ於テ開催セラレタル万国皮膚病学会へ会員トシテ出席ス
 同年十月伯林医科大学へ入学ス
 同 十月伯林市立ウルパン病院プロフェッショナル・ペンダー氏ニ就キ病理学研究並ニゲハイムラート、プロフェッショナル、ケルテ氏ニ就キ外科手術研究兩来引続キ同病院ニ於テ研究中
 右報告仕候也

明治卅八年四月卅日
 京都府立医学専門学校校長 島村俊一殿
 池田廉一郎印



レントゲン室(1914年, 大正3年)

ない。病院附属の医学学校で短期間によく間に合う実地家を育ててきた伝統がやはり一朝には改まらなかったというべきか。

ところで、研究成果が学位という栄誉で報われることが一方で期界の発展に資する所が大きいことは否定できないにしても、関西に京都大学が出来て学位認可申請権を持つに及んで、東西の牽制は仲々のものであったらしい。その軋轢の渦中に本校出身者が捲き込まれたことから、当時学内外に大きな話題を呼んだ事件があった。大阪の湯川胃腸病院長湯川玄洋(明治22年卒)の学位申請論文中『日本僧侶(純植物食)の栄養』がそれで、東大助教授某がこれについて詳細な反論を發表し、京都大学での審査は大もめにもめ、とどのつまり投票の結果は1票差というきわどい形で通過した事件である。これについてはいわくがあって、先刻東大で通過した論文に京大の教授が手きびしい反論をしたことのしっぺ返しだといわれ、本校内でも一しきり議論の種となった。学界の裏面での学問以外の場でのいざごさは今に変わらず、むしろもっと権威と面子にこだわる奇妙なものだったようだ。某教諭は学生を前にしてこのドクトル問題について2時間にわたって述べたといわれるが、学位が稀少価値であった当時の熱っぽい興奮がうかがわれる。こうした挿話をはさみながらも学位令は一方で着実に当時の学問進歩の一大刺激となっていた。明治の学歴主義の社会では医学士は絶対的な権威

で、かつてより甲種医学校には三名以上の医学士が絶対条件で、医学士でありさえすれば、その後の業績にはあまり触れなかったぎりぎりさえあり、専門学校になって以来も下表にあるように医学士と医学得業士や開業免許者とは格段の待遇の差があり、これを学問の領域で対等になるためには学位を取る外になかったからでもある。



創立三十周年

発展のあと二駒

創立三十周年記念式典と建築落成式

話はいくぶん前後するがこうして苦難のなか

にも着々と発展する本校史を画する二つの式典についてふれ、発展のあとを鳥瞰してみたい。

創立30周年記念式典は1908年(明治41年)11月6日盛大に举行されているが、1921年(大正10年)に50周年が、1952年(昭和27年)創立80周年が、そして本1972年(昭和47年)100周年が祝われるとすると、30周年のみ計算があわないので、この点についてまず述べておくと、30周年の根拠は明治12年4月16日、下立売通新町の仮中学校内の医学予備校を廃し、療病院内に医学予備校と修業年限4年の医学校を設けた時としているわけである。それまでは生徒を集めて講筈をなすといっても一定の校舎なく生徒と称するものあるいは来りあるいは去り、一

明治三十七年本校職員俸給及資格

職名	俸給	資格	人員
校長兼教諭	年俸三〇〇〇円	医学士	一
教諭	同 二五〇〇円	同	一
同	同 二〇〇〇円	同	四
同	同 一四〇〇円	薬学士	一
同	同	第三高等学校 医学部実習	一
同	同 一二〇〇円	内務省医術開業 免状	一
同	同 七〇〇円	京都医学得業士	一
同	留學中年俸 六五〇円	医学士	一
助教諭	月俸 五〇円	京都医学得業士	一
同	同 三五円	同	一
同	同 三〇円	同	一
同	同 二五円	同	二
同	同 二〇円	同	一

他に助手二名月俸一四円と一〇円

書記八名月俸一三元から三〇円まで

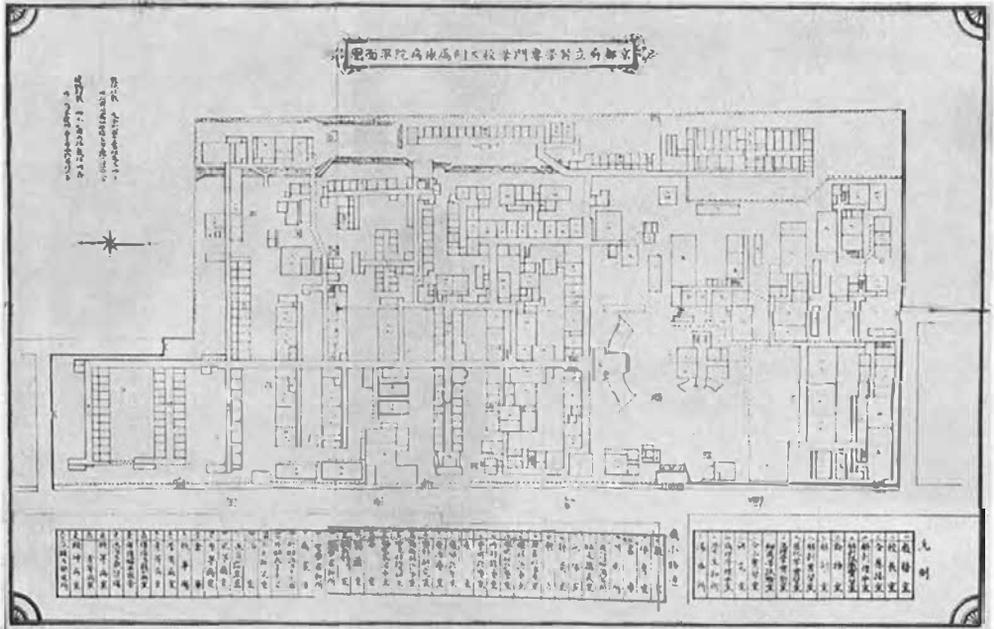
療病院医員有給一七名月俸一三元から二三円無給五名

調剤員五名月俸一六円から二五円

(明治四十四年医学士副島守四郎教諭着任の際の年

俸一八〇〇円、同年令の京都医学得業士教諭中村

登八〇〇円、助教諭喜多川六三郎月俸三五円)



(1914年・大正3年11月)

遅日の夢

一、遅日の夢のほの白き
花橋の香に匂ふ
御溝の水の温みては
鴨の川原の月見草
楊花は落ちて杜鵑
平安城を筋違ひに

二、夏の火峰に登え立つ
堯を走る稲妻も
幾春秋を光栄の
歴史飾らん彩にして
降魔の剣抜き放ち
天職に勇む丈夫よ

三、秋の入り目に亡びゆく
傷き肉の哀みに
聖も王も現世の
希望を捨てて烏羽玉の
噫を救ふ術あらば
永久に黙せよ鐘の声

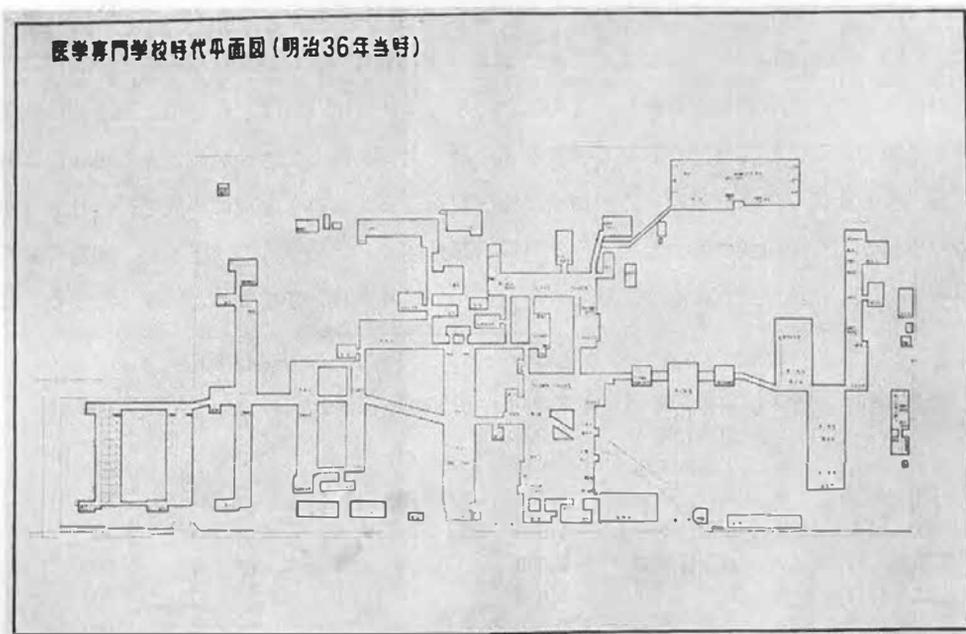
四、木蔭に残る霜柱
日脚短き人の世の
誰かは起ちて救はずば
いつか竜鵜の時やある
常世の春の幸を祝ぐ
我等が使命重きかな

学生団の歌

伊昔紅作

大正3年落成式典に際し発表され予科廃止時まで盛んに歌われた「学生団の歌」、後「校歌」となった

医学専門学校時代平面図(明治36年当時)



私が四年生の時である。大正三年十一月二十三日、本校及び療病院の改築落成式典が行われた。改築をはじめて十二年目に全く竣工をみたのである。お祝は盛大にやりたいという学校側の意向なので、学生達も嬉しい亢奮に駆りたてられた。唯その際、学生一同で歌う校歌が無い。それで早急に校歌募集のことを学生間で決めてしまったのである。その時応募した私の歌が「遅日の夢」だった。この当選した歌詞を携えて、当時の校長工藤外三郎先生に之れを校歌として認めて呉れとお願ひしたのだが、先生は学生自身で企図したことだから校歌として認めることは出来ないと突跳ねられてしまった。つまり私物だからいけないということだった。この押問答の中へ入られたのが梅原信正先生だった。先生の計らいで学生団の歌、即ち団歌といふことで発表された。後であの歌が校歌になったという話を聞いて、私はこんな風に考えた。内縁関係ではあるが、永年連れ添っていてもまだ子供が出来ない、さう云うときに生れた子は随分可愛がられる。子まで出来た以上、籍を入れなければいけないので、正妻に直すことにした。そうならいつまでも私生児でおくわけにいかない。立派な嫡出子として認知される。之と同じ理窟で、団歌という私生児が校歌と云う嫡出子として育てられたのである。

定の方針もないまま一名も卒業生を出していなかったからである。だとすれば1909年(明治42年)4月16日が然るべきなのに、どうい理由かその前年の、しかも11月6日という日に行なわれていて、その前年に行なわれるのはいいとして日付けの方はどうしてこうなったか今はもう裏づけるよしもない。しかし学校行事の最も大切な創立記念日がかように曖昧では困ると、その後種々考証討議のすえ、創立は療病院が三条粟田口青蓮院に開設された日まで遡るのを是とし、開院式のあった明治5年(1872)11月朔日と定められるに至った。50周年式典(1921)では、これが正式に取り上げられ、前の年の11月1日とされることになった。もっと

明治36年6月				明治42年1月			
校長兼教諭	医学士	島村 俊一	年俸 2,500円	医学博士	医学士	島村 俊一	年俸 3,000円
内科	"	望月 惇一	2,200	"	"	"	2,500
"	"	工藤外三郎	1,900	"	"	"	2,000
外科	"	池田廉一郎	1,900	医学博士	医学士	池田廉一郎	2,200
眼科	"	伊藤 元春	1,900	"	"	"	2,200
産婦人科	"	秋元隆次郎	2,000	"	"	"	2,200
皮膚耳科	"	江馬章太郎	1,050	"	"	"	1,400
神経精神科	医学士	島村 俊一	2,500	"	"	"	3,000
化学	製薬士	町田 伸	1,400	"	"	"	1,400
生理学	医学士	永井 徳寿	1,900	"	"	"	2,200
解剖学	"	赤座寿恵吉	1,300	"	"	"	1,600
病理学	京都医学得業士	角田 隆	600	"	"	"	1,000
助教諭	6名	月俸 50~20円		小児科	医学士	本庄謙三郎	1,800円
嘱託教員	6名	40~10円		衛生細菌学	京都医学得業士	常岡 良三	800円
講師	1名	年 360円		解剖学	愛知医学得業士	前島 長裕	900円
助手	2名	月 14~10円		内科学	京都医学得業士	伏原 寅男	700円
書記	8名	月 30~13円		幹事		柿沼鉦太郎	900円
				助教諭	9名		
				嘱託講師	11名	年600~240円	
				助手	5名	20~15円	
				書記	7名	30~20円	
				同左			
療病院				庶務部	柿沼鉦太郎(兼)		
院長	島村 俊一(兼)			部長	10名(兼)		
幹事	大野 政忠	月60円		医員	32名(内4名兼任)	月25~15円 無11名	
部長	8名(兼)			調剤員	8名(内1名兼任)	月23~16円 1名10円	
医員	24名(内2名兼任)	月23~13円無給5名		書記	12名(内7名兼任)	月30~20円	
調剤員	5名	25~16円		諸府人校院を通じて	71名		
書記	12名(内9名兼任)			看護人	135名		
看護人	60名	雇員63名		入院患者1日平均	220名		
入院1日平均	110名			外来	350名		
外来	137名						
外に学用患者入院	22名	外来 33名					
卒業生	49名						
入学志願者		合格		志願者		合格	
37年度	340名	102名		40年度	570名	130名	

も開院式のあった明治5年11月朔日は太陰暦によるもので、同年の12月3日から太陽暦に改められ、その日を明治6年1月1日としているから、現今の11月1日は新暦、旧暦を混乱したままの不合理なもので、問題がないわけではない。正しくは換算して12月1日になるわけだが、従来の慣例と季節の関係からそのままになっているらしい。

細かな詮索はともかくとして、明治41年11月6日に挙行された30周年式典は、10年前京大開設時の廃校論議をすでに往昔の語り草と化せしめ、校舎新築の工もその半ばを終え、旧態を一変し、今や進んで附属病院の増改築に着手して行く晴れがましい一幕ではあった。明治

36年度卒業生総代田村矯郎の祝辞は簡明にここ数歳の本校の歩みを伝えている。

「生の始めて此校に学びしは実に明治32年の春なりき、同年夏京都医科大学創設せられ諸先生相次いで榮転せらるゝあゝ是時に当てや一犬虚を伝へて万犬吠ゆるの例へに漏れず実は虚を伝へ虚は実となり一時我校の存廃を疑はしむるに至れり、当時此の校に学びし生等感想如何なりしぞ徹宵島村校長を訪ひ校事を叩きし事幾度なりしを思はざりき未だ数歳ならずして英邁篤学の士各其の科に当り校運伸張校舎新に成り此処に是盛典に遇はんとは是れ元より時勢の然らしむる所なりと雖も亦当路の士校にあるの人拮据経営精勵劃策の結果たらずんば非ず希くば各自一層其職責を尽し我校をして益々發展隆盛幾十百年再び相会し祝賀するの期を得せしめよ……」。

相会し祝賀するの期は6年後に早々と訪れる。1914年(大正3年)11月23日の新築落成祝賀式である。米賓、同窓生の意気盛んなる祝辞は6年前と変わらず、宴会余興の数々の賑いも6年前をしのぐわけではなかったが、前回に続いて行なわれ

大正5年4月

	医学博士医学士	工藤外三郎
	"	工藤外三郎
	医学博士医学士	小川瑳五郎
	" "	河村 叶一
	医学士	増田 隆
皮膚病学 梅毒学}	"	加治 安信
	"	佐谷 有吉
	京都医学得業士	野田 浦弼
調剤実習	薬学士	立入保太郎
	医学士	越智 真逸
		同 左
医学博士	京都医学得業士	同 左
	"	
	"	
医学博士	金沢医学得業士	岡島 敬治
医化学	医学博士医学士	吉川 順治
耳鼻咽喉科	京都医学得業士	中村 登
独逸語学	倫理学 文学士	広木 多三
歯科学	医学士	本永七三郎
病理学	京都医学得業士	梅原 和助
	助教諭8名	助手10名
	講師3名	書記11名
院長	工藤外三郎(兼)	
顧問	島村 俊一	
部長	10名(兼)	
	外に庶務部長 中道 貫一(兼)	
医員	38名(内4名兼)	
調剤員	10名(内1名兼)	
書記	14名(内10名兼)	
事務員	6名 囑託技師3名 庸人院校を通じて80名	
看護人	152名	
入院患者	平均	229名 外来 361名
志願者	合格	
大正3年	849名	104名



療病院本館（1914年・大正3年完成）

た医専・療病院縦覧の機会を両度体験した人々はこの6年間に医専・療病院の格段の充実に目を奪われたであろう。一般市民の縦覧ともに無慮一万を数えたといわれ、府民の病院として頼もしい発展に喜ばぬものはなかったはずである。前ページの表は講座、職員、入院・外来患者数、入学志願者数などで、専門学校誕生時と30周年式典と新築落成式の時点を列挙し当時の医専・療病院の状態とその発展の過程をたどってみた。

大正3年の教諭陣大改革

1914年(大正3年)11月には10年来拡張に拡張を続けてきた医専・療病院の新改築落成式が華々しく挙行され、明治38年来営々と整備してきた医専・療病院の威容が完成する。しかし、苦境の中をただ一途に拡張を目指してきた贅寄せは、徐々に蓄積しており、建築熱、改築熱のほとぼりが覚めて、気がついた時には深刻な亀裂が内部に大きく口を開いていた。専門学校誕生以来の内容外観の拡充も、表向きは我国に冠たる医師養成機関としての学校と公立病院としての立派な医療施設の充実を謳ってはいても、一旦裏に回って経理面に目をむけると、これまでのしきたりで一切は病院収入で賄わねばならなかった。他府県の同種学校にあってはほとんど府県の補助を仰がない所はないのに、独り本校のみ特別会計の下に独立していて、府立とはいえ府の一般会計からは一文の補助も仰ぐことはできなかった。明治20年の医学校への府県費の支出を禁ずる勅令48号はとくに廃止されていたのに(明治22年5月)、このしきたりがいつまでも踏襲されているとは、京都府の財政が豊かでなかった事情はあるとしても、いかにも奇妙である。前記10年間の新改築に投じた39万9千余円の財源はどこから出たかという、医学校以来せせと蓄め込んで来た医学校資金(36年度現在で整理公債9,300円、軍事公債4,950円、市公債73,000円、預金9,899円24銭9厘、計97,149円24銭9厘、この



鴨川をへだてて

毎年平均2万円加わり、つまり病院は毎年5万円からの収益をあげねばならないのだが、着実にのびていた入院料、手術料などが大正期に入って不景気の影響をもちかぶって停滞どころか数年前のレベルに後退し、決算の推移は甚だ悲観的で、公債返済の見通しにも暗い影がさしてきたのである。やみくもに手を掲げてきて、ほっと一段階、気がつけば行手に影、落成式の喚声のかけでは経理担当者は頭をかかえていた。この時打開策としてとられたのが、寝耳に水の形の教諭陣容の大々的更迭という大鉦であった。

1914年(大正3年)7月、眼科教諭伊藤元春、皮梅科教諭江馬章太郎、幹事庶務部長柿沼鉦太郎、教務主任助教諭清田専蔵、助教諭喜多川六三郎の諸氏が依願免職となり、産婦人科教諭秋元隆次郎、解剖学教諭前島長裕、書記木寺近信、谷川善太郎の各氏が休職(1年間の休職後退官)、少し遅れて外科教諭副島予四郎辞職して京都医科大学助教授に転出するという空前の大異動が行なわれたのだが、公表にさきだって6月28日大阪朝日新聞はこれをスクープ、「京都医専混乱す——療病院4部長その他の免官——四年生結束して立つ」と大きく報道、それも「未曾有の大改革」、「校内の大暗闘」、「学生の恐慌」、「将来の悲観」の見出しでセンセーショナルに報道したのだから、校の内外に大きな波紋を起さずにはいなかった。全くの寝耳の水の報道とあれば、その背景について盛んに揣摩臆測が入り乱れたのも当然である。ここ兩年各地医専の内紛が世評に登っていて「昔はお家騒動、今は学校騒動、而かも大人しかるべき医専に比々たるに至りては豈驚かざるを得んやで長崎に名古屋に岡山に何んぞ某れ物騒ならむや。尤も底には蓋も実もありて逐一之を詮議立てすれば嘔吐すべき醜の又醜なるものあるが如し……」とは先年報じられたことだが、今第4の騒動として恰好の新聞種になり、しかも地方版は逐一不審点を詮議立てし、いち早くこれをスクープした朝日新聞は

京都附録(現在の京都版)でも矢つき早やに6月29日、7月1日、7月2日附けて、日出新聞(京都新聞の前身)は6月29日、30日附けて、大阪毎日には7月2日附の京都滋賀附録で一斉にこの件をとり上げ、学内の大学派、医専派の派閥争い、東大派、京大派の軋轢、感情問題のしこり、個人的エピソードの数々を臆測を混じえて報じるとなれば、学生の間でも憂校の余り教室の此所彼所に集い談じ、偶々ポリクリのある4年生を除いては夏期休暇に入っていたが、帰省中の3年生以下をも呼びよせんとの不穏な空気に沸き立った。つい数年前まで上り坂の黄金時代で校長島村博士、外科池田博士、内科望月、工藤両博士を擁し、附属病院の繁昌は一時京都大学を凌ぐほどといわれたが、島村博士病みて職を退き、池田博士新潟医専に転じ、望月博士校長の職を継ぐも、過般の外遊後、脳神経憂鬱症とかにて出勤もままならぬとなれば、不景気の影響もあって病院収入が一時停滞するのは必然ではあろう。不景気といえばここ兩年、大学高専卒業生の失業者増大し、「高等遊民」が問題化し、また貧困者目に見えて増加し、施療院、施薬院が各所にできるなど、暗い話題が渦まく時勢なのである。しかし、新改築が一段落し、病室も拡張しきった今、爾後の起債もならずとあれば、一時の収入停滞は予測できぬことではない。公債返済も今降って湧いた事柄ではなく当初から分りきったこと。それに専ら経済立直しのための改革としてはあまりにも突然にして、また不審な点が多い。病院収入の増加を目指す新陳代謝人事というなら基礎部門の前島教諭の更迭は筋違いだろうし、伊藤、秋元教諭は二年間のドイツ留学から帰朝したばかりで(伊藤教諭は大正元年10月、秋元教諭は大正2年11月、つまり8カ月前に帰朝)、留学規定第7条に定められた帰朝後の義務年限の最中、留学の成果はこれから現われる筈のもの、また近時の収入停滞には留守中の両教諭の責任は殆んどない筈でもある。また「職員の新旧交替によって給料において年4~5,000円節約せんとする財政整理」が一方で大義名分になっているが、詳しく調べてみると、改革後在任教諭、助教諭の増俸を行ない、新任教諭着任後の俸給経費は決して節約になっていないのみか(大正2年度教諭助教諭俸給28,575円、大正3年29,429円、大正4年30,420円、大正5年33,026円)、かえて別に、退職賜金などの余分の経費3,800円の負担増にさえなっている仕末。今になって当時の真相をうかがい知るよしもないが、順調にことが運んでいるときは少々のことでも表にでないが、一旦つまづきがくると、これまでの些細なもつれも大きく取り立てられ、責任のなすり合いが始まるのが世の常。府会の記録やその他の資料から推測すると、手腕はあっても協調性のない性格からとかくの風評のあった伊藤教諭にまつわる感情の問題が外的事情からこんな形に発展したのではないかと思われる。後代の外部からの推測を強調するのも片手落ちだから、当時ことに当たった角田名誉教授の80年史にのっている談片を次ページに再録しておこう。

公表時期が丁度夏期休暇に入ったあとで、3年生以下の生徒が帰省中であったこともあり、



望月 惇一

4年生に対する説得もうまくいって、先年の岡山医専におけるような学生を捲き込み、果ては校長引責退陣に至る大紛糾には至らず、また大正元年来京都でも専らの話題であった大谷大学の同盟休校事件、仏教大学の学生大量退学事件、同志社大学の社長排斥の学生騒動の轍もふまず、手ぎわよく後任教諭を迎えて、この問題は収まる。当時としても問題の大きさと当初のセンセーショナルな報道、内容の曖昧さに比べてまもなく平静に返った様子は、望月校長が憂鬱症で転地療養中という事情が幸便に働いたか、工藤、角田教諭などことの折衝に当たった人たちの手腕を讃むべきか、あるいは明治44年広木教諭排斥の同盟休校が潰れ、15,6名もの落第者を出したにかい体験が学生一同の行動を慎重にしたせいもあったのか。

後任の人事は余りにもすばやく行なわれた。更迭の発表が全く抜き打ち的であったのを思えば、内部での進行はひそかにかつ着々と行なわれていたようだ。8月、眼科の伊藤教諭の後任には京都帝大医科大学助教授医学士小柳美三、皮膚科江馬教諭のあとには東京帝大医科大学助手医学士佐谷有吉、解剖学前島教諭のあとには京都医科大学助手金沢医学得業士、医学博士岡島敬治、外科副島教諭のあとには京都医科大学助手医学士医学博士河村叶一、9月に産婦人科秋元教諭に代って、同じ京大より医学士加治安信が任命される。また幹事には府庶務課長中道貫一が就任。10月、病氣療養中の望月校長が休職となり(一年後退職)、後任に工藤教諭が校長を継ぎ、兼附属病院長、兼内科第一部長に、望月氏のぬけたあとを長崎医専

角田名譽教授の談片

当時の学校・病院の経営は、先に京大創立当時各教諭が転任の後、非常な難関に遭遇したと同様、其の経済状態は非常に苦しいものがあつた。所謂本学第二回目の経済危機に直面していたのが実状であつた。府から補助金を仰ぐことも出来ず、全くの特別会計で、文字通りの自給自足をせざるを得ない状態であり、教諭の研究上必要な図書・実験用動物等も、教諭の乏しい俸給の内から自弁しなければ、学生を指導することさえ出来ぬという有様であつた。……此の所謂経済恐慌時代を如何に打開するかが、当時学校として大きな問題であつた。当時基礎医学の方は兎も角、臨床部門に於ては教諭の手腕力量又は患者に対する熱意等の点兎角の批判もあり、旁々改革の必要が多分に感じられた。此際教諭の陣容を一新して、先ず何よりも病院の収入増加を計らねばならない。此意味からも一部教諭の勇退を願つて、新進気鋭、然も有能の士を迎えることこそ現下の急務であると云うことに、学校当局の意見が一致するに至つたのである。私は甚だ憎まれ役を買わねばならぬ破目となつたが、愛校の精神から又止むを得ない。一朝事志と相違した場合、自らも責任を痛感して学校を去るの深い決意をして、茲に数名の教諭の勇退を願つた次第である。副島教諭はしつかりした人であつて、自己の外国留学を強力に要望せられたが、留学は願ふも学校は直ちにこれを容れることは不可能であつたので、自ら辞任、再び京大伊藤外科の助教授に復帰することとなつたのが真相である。幹事柿沼鉉太郎は、この犠牲者を出したことに對し責任をとつて、自ら退職を申出で、退職後直ちに東京日本赤十字社本部の要職につき、又同時に、永く教務課の事務主任の職にあつた清田専蔵も、今回の異動と共に辞職、本校を去ることとなつた。……

教授医学士医学博士小川瑛五郎が埋めて内科第二部長となり、大正3年のさしもの大改革も幕を閉じる。これまで決まって3月乃至4月に少しずつ手直しされていた学則がこの年に限って8月に、しかも大々的に学科目を加除し、試験法と及落評価を変える大改正が行なわれたのも、また10月に職制の一部を改正し学生監を置くことになり、教諭角田隆が学生監兼任となったのも、改革に附随した処置であったようだ。

下記に大正3年以降の医専・療病院歳入歳出を表にしてあげたが、第一次大戦後期の景気回復(いわゆる大戦景気)という外的事情の好転もあったが、患者も増加し、財政は目に見えて好転し、特に大正8年以降は5万~10万の益金を出すようになるのだから、この大改革も一応成功したといえようか。そしてこの危機を美事に乗りきったことが、大学昇格を実現させる第一の条件ともなった。

こうして医専・療病院としては経済的に立直って行くことになるが、どうも気になるのは、ここ数年の不景気の中で、一般開業医の中にも、例えば新柳馬場仁王門南の医師三宅文淑など貧困者のための施療施薬を行なうもの多く、また細民施療施設博愛社、済生病院、京都救

大正期収支決算				指(日銀卸売物価指数) 明治33年=100		病院入院料比較				
収入		支出		指	米価1石	大正元年 医事保険誌10月号				
						特等	1等	2等	3等	
大正2年	283,369,788	283,369,788	132	21.50円	医科大学		3.00	2.00	1.00	
3	249,639,193	249,639,193	127	15.67	府立療病院	5.00	3.50 3.00	2.00	1.00	
4	254,093,550	250,797,643	128	11.50	佐伯病院	2.50	1.30	1.00	0.80	
5	290,088,390	266,597,780	155	11.50	東山病院		1.20	0.90	0.70	
6	320,234,100	317,657,—	195	21.00	中立売病院	2.00	1.50	1.00	0.75	
7	418,389,040	384,099	255	30.00	岩倉病院	1.50	1.30	1.00	0.80	
8	562,053,220	518,372	312	45.00	福知山病院	1.00	0.55	0.45	0.35	
9	873,008,820	827,455	343	41.50	足立産婦人科	6.00	3.00	2.00	1.50	
10	1,285,367,830	1,083,271	265	31.57	奥山病院	5.00	1.50	1.20		
					朱雀病院		3.00	1.50		

府下病院と本療病院患者数比較								
	府下病院総計				療病院			
	入院患者 実人員	入院 施療	外 来	外 来 施療	入院患者 実人員	入院 学用	外 来	外 来 学用
明治44年	6,155	335	69,570	1,375				
大正元年	6,576	331	74,366	1,625				
2	7,033	423	77,651	2,798				
3	6,877	806	71,473	8,831	2,208	409	15,231	2,398
4	7,053	907	72,507	8,633	2,471	378	16,778	1,815
5	7,588	907	74,667	10,420	2,531	298	18,318	1,878
6	8,325	793	85,671	8,889	2,918	272	25,220	1,775
7	10,492	618	108,555	3,739	3,282	248	29,331	1,333
8	10,924	1,076	109,510	4,318	3,636	326	34,659	1,180

かかわらず、その本校に及ぼした様々な波紋は良きにつけ悪きにつけ日露の時は比較にならない大きなものであった。

まずその外的な影響は医薬品価格の暴騰である。従来薬品の多くはドイツより輸入しており（輸入薬品の割合はドイツ5割、英米各2割、濠州その他1割）、この輸入が戦乱によって殆んど完全に杜絶したからである。前ページの表は戦前戦中の薬品価格だが、地域によってなかには5倍に達したものもあり、輸入に関係



病理解剖風景(1914年、大正3年)

しない国産薬品までその影響をうけて暴騰した。附属病院では当時毎月平均1,500~1,600円内外の薬品原料を市内の指定薬種問屋から購入していたが、この値上がりが病院の運営に及ぼした影響は決して小さくなかった。公立病院であるからには、原価が上がったからとて、直ちに薬価を値上げするわけにはいかず、サルバルサンなど一部のものの値上に限り(サルバルサン一本0.6cc6円を16円に)、不景気に加えてこの薬価暴騰に、以後の病院経営は非常な苦渋を味わったことが一つ。所が面白いことにこの苦境が先刻の必ずしもすっきりしない内部改革を納得させる要素として働いたふしがあって本校としてはむしろ幸運とさえなっている。

もう一つはもっと精神的な、根本的なショック、つまり、日独矛を交えるに至ったことで、これまで師とも仰ぎ、頼みの緒ともして来たドイツ医学との絶縁である。これが本校に限らず、本邦の医学者に与えた衝撃と動揺は決して少なくなかった筈である。以下は当時ある医学雑誌に載った文章だが、戦時下敵国を意識してのオーバーな感情的表現とはいえ、これまでの我国医学界の宿弊について鋭い。「独逸医学に非ざれば夜の明けざる如く、独逸語を解するものに非ざれば共に学理を談ずるの価値なきものとされ、一度独逸の地を踏まざれば学者の待遇をなさず、独逸留学の経歴を有せざれば博士をとるに不便なるものの如く、世界の医学は一度独逸に於て濾過さるるにあらざれば価値なきものとせられ、而して日本医学者は其為す所、為さむと欲する所、只管独逸に近似せざらむことを憂う……教授は全然独逸医学の紹介者たり、翻訳家たり、受売業者たり、広告屋たるやの観あり、学説の研究方法に治療設備に独逸風を鼓舞し、口を開けば独逸を賞揚、『最近の報告によれば』と言へば主として独逸人のアルバイトを意味し、和魂独才にあらずんば医学者としての存在価値を認められず……」。いささか一面的な極言であるとしても、日独戦争を契機にこうした反省が生まれ、とかく指摘された独逸医学追従の宿弊を今芟除し、模索のうちにも日本医学の独立を自覚せん



臨床講義(1912年・大正初年)

とする機運が起こる。偶々京都大学の松下、藤浪両教授は、日独戦争を機に日本医学の独立を図らんとし、手始めに爾後講義には断じてドイツ語を用いず、一切日本語をもって教授することを宣言したのも、いささか滑稽ながら、その一端のあらわれだった。松下教授は、奉天医学堂における邦人教授が大抵ドイツ語を以て談話するので中国人学生等は日本人を侮り、ドイツ人を目して学識深博なりと過信、青島のドイツ医学校に転ずるあり、との噂を耳にし、これぞ従来ドイツ糟粕を甜め過ぎた罪のあらわれと慨嘆、「既に我医学が今日の状態に進歩したる以上は何を好んでドイツに学ぶ要あらんや、須らく有害無益なる留学制度を廃止すべし」とさえ説いたという(医事公論大正3年9月25日)。ドイツ留学生の中には論文を作るために、あるいは極端なのは論文を買いに行ったとさえいわれた当時の風潮への警鐘として、たしかに一籌を輸するものとはいへ、後の日米戦争中に敵性語として英語を排した狭量に類すべきもので、当時の医学者の内的動揺をあらわしてもいる。だがこのことが日本医学独立の一契機になったとすれば、喜ぶべきことといえようか。

本校ではこんな極端な動きはなかった。由来本校はドイツ語の教育に特に力を入れていて、講義に用いるドイツ語も、他の医専に比べるときわだって多かったといわれ、それを一朝にかえることはできなかったからだ。それでも落成記念式では「独逸医学何ヲ以テ吾人の羈絆トナスニ足ランヤ」とか「敵は欧州に在り…敵の壘を摩するのみならず、之を陥落せしむること青島の如きの意気を有せらるゝを信じて能わず…」の勇まし式辞が飛びだしている。しかし職員間の心中の動揺は想像できる。留学先のドイツで大戦に会い、ロンドンに避難し、後年無事帰国した本庄、常岡両教諭を最後にして、以後の留学生はアメリカあるいは英瑞に流れ、ドイツはしばし本校の医学の主流からはずれ、学位論文もこれまでのドイツ語一辺倒から英文、邦文のものに切り変って行く。大戦中一時頓坐したドイツ医学は、戦後の復興と共にやがてまた徐々に我国への影響をもち返してくるが、戦前の神格化されたそれとは自ずと性格も変っていたわけで、第一次大戦時の医学界に与えた衝撃、混迷は第二次大戦後のそれと比すべきではなからう。

もしここ数年の不景気に薬師の暴騰が加わるこの状態がもっと長く続いていたなら、師を突如失った形の本邦医学の低迷模索は深刻な事態を惹き起こし、ひいては医専・療病院の運命もどう変っていたか測り知れない。大正3年の大改革の成否もどう転ぶか分らなかったの

だから。現に大正6年頃には、仙台医専が東北帝大医科大学の医学専門部に組み込まれた如く、本校を京都帝大医科大学の附属となし、大学の二部の形にする企画ありとの噂が流れ、独立の存在を危ぶまれて、校内が動揺してさえている。世の風向きが少し変わるごとに、鴨川の東に大学があるからとの理由でその存廃が取沙汰されるのが本校の宿命でもあったようだ。はるか海の彼方の戦乱でさえこうであった。

ところが1916年(大正5年)頃より始まった株式の大暴騰から、いわゆる大戦景気が生まれ、一時青息吐息の諸工業、とくに西陣などの繊維工業も俄かに息をふきかえし巨大な戦時景気に沸き立つにつれ、病院収入も觀面目を見張るばかりに急増することになり、事態は急転する。前記117ページの収支表にあるようにどん底の大正3年から比べると大正10年までの7年間に実に5倍もの大成長をしていて、前述のようにこれが大学昇格の有力な背景となりえたのである。そうしてみると、ドイツ医学との一時の絶縁も、うまい具合の経済好況に裏打ちされると日本医学自立の恰好の試練という働きのみ残す形になったわけである。第一次大戦の及ぼした起伏に富む功罪も、本校の発展の跡を色どるちょっとしたプロットであった。

やっとなんが教授に

専門学校令がしかれて以来、法律の上では本校も官立専門学校と同等の資格を認められてはいたが、内実は種々の格差をつけられており、卒業生の称号も当初しばらくは京都医学得業士を名乗らされ、明治42年になってやっとなん校名を冠した医学士の称号が認可されたのだが、その時も、設備の上で様々に文句をつけられ、応用的学術の方面に比し基礎医学において遜色ありとされたり、学用患者や解剖体数の不足についておこごとを喰ったりで、なかなか許可が下りず、関係者が文部省に日参してやっとなん実現する有様であった。ことが難行する理由のもう一つに、かつて本校の入学生が府県立中学校卒業生のみでなく、私設の京都医学予備校の出身者が多くを占めていたことがある。レベルの維持のためには、頑固なまでの学歴主義の積み上げを求めたのは、理由のないことではないにしても、明治以来の日本の学制の特質をあらわしていよう。こうしてまがりなりに卒業生には出身校を冠するとはいえ医学士の称号が与えられ、やっとなん官立医専と対等に漕ぎつけたのではあるが、それはまだ卒業生に限られていて、ここで教鞭をとる教師の方は、その後も久しく官立医専で用いられている教授、助教授の称号は認められず、師範学校、中学校と同様に教諭、助教諭という直轄学校教授とは差別的称号に甘んじなければならなかった。官学優先の格差はなかなか埋めるに至らない。大正3年には、かつて東大を首席で卒業し、その名声は広く聞えていて、東北帝大の教授に予定されていたという長崎医学専門学校教授、医学士、医学博士小川瑳五郎がこわれて着任し



工藤 外三郎

だが、教授内容、教授レベルに何の違いがあるわけでないのに、とたんに京都医専教諭となるとは、如何にも奇妙であり、御本人の心理的抵抗もさぞやと思われる。官立学校の直参意識はおいそれとは改まるものではなかったようだ。「学士様なら娘をやるか」もその一端のあらわれで、直参、譜代、外様、士農工商の封建的ヒエラルヒーは大正デモクラシーの洗礼を受けてもなかなか抜けない。ひょっとして今だに実力にかかわらぬ理不尽な優越感とその逆の劣等感は依然残っているのかもしれない。これがやっと法的に改善されたのが大正6年1月27日の勅令第5号公立学校職員制の発布からである。ここで教師の側でも官立医専と対等の教授、助教授の呼称が行なわれることとなる。医育統一論はすでに早く明治42年2月八木代議士の建議によって衆議院で議せられ、当時より大阪高等医学校などは名実共の医育統一、公立医科大学の設置を目ざして猛運動をしていたわけだが、それはそれとして、表面的な差別は何と大正6年まで改っていないのである。内実の進展がどしどし進んでいても、本当にそれが熟しきるまで形は備わぬのが、あるいは形を与えないのが近代日本の歴史の特質であったのだろうか。ところがこうして形の上で官公私の同等が実現したとなると、あとは一気に阿成に大学令になだれ込み、二段飛び、三段飛びに、帝国大学と同格の単科医科大学にまで躍り上り、学位認可権まで手にいれることになる。後から考えると着実なカーブを描いて上昇しているかに思えるが、そしてたしかに一部では着実な努力が積み重ねられてはいるが、実は形の上ではぎくしゃくした階段状の上昇で、大正8年の大学令公布の実に2年前まで先述の差別が続いているのである。

先に述べた大阪高等医学校の精力的かつ長期の昇格気運は、本校においては、およそ認められない。大学は大学、高等な学問研究はそちらに任そう、こちらは医専であって、大学より費す所と期間少なくして比較的好く間に合う実地家を育てるのだというのが、淋しいかな、本校の少なくとも大正6、7年までの支配的雰囲気ではあった。それというのも、再度述べることになるが、昇格論議の盛んな大阪や金沢などとは異なり、京都には帝国大学の一分科たる立派な医科大学が存在していて、しかもそれと鴨川をはさんで対峙しているとなると、大学に対してははっきり特色をもつもの、つまり少しく程度は低くても、てっとり早く世に出て実務につきうる開業医養成の医専であることこそ存立の理由とする明治32年来の考えが根づよく生きていたからである。ただでさえ独立採算で苦しい所を無理算段して同じものを併列さす必要がどこにあるかというのだ。この気風が一方で実用教育にのみ力をそそぎ研究意欲をとかく萎縮させる形に働いたからとて無理はないにしても、同程度の官立医専との格差にまで久しく甘んじなければならなかったという二重の屈折を強いられるとは、公立医専であ

る本校の立場もつらいものといわねばならない。今やっと形式の上でも教師学生ともに対等の立場になりえたとなれば「葦酒ナラヌ京大ノ，山門ナラヌ京医専ニ入ルヲ許サズ」と高言したという教授の気概も頷けようというもの。漸来いずこの医専でも問題になった大学派と医専派



産科手術場(1912年・大正初年)

の対立は，本校においても，つとに噂されていた。大学派が鶏頭たるに安んじていたとはい



島村博士 銅像

わないまでも，こうして徐々に格差をつめていった医専派の気概が，官学優先の気風に対する良い意味での対抗意識として，本校の発展を支え，他日の大学昇格に至る階梯を築いていったといえようか。話題になることはあっても，常に医専の特色という意味で否定的に消えていった大学昇格問題が，大正8年大学令公布とともに勃然と燃え上り，一気に実現に漕ぎつけたエネルギーのもと，官学優先のもとに忍従して来た長年の蓄積の爆発とっていい過ぎではなかろう。

医専の歴史の象徴，島村博士寿像

図書館の東北，現在の看護学院との間の一隅に校内唯一の銅像として島村俊一博士の寿像が今も残っている。1916年(大正5年)博士が22年間盛衰を共にした本校を去るに当って，博士の功労を讃えんと島村博士表頌会が結成され，その酬金をもとに建てられたもので，

1917年(大正6年)11月11日博士誕生日に除幕式が行なわれている。医専の歴史の盛衰を，もし一人の人物に代表させようとするれば，あらゆる意味で，医専初代校長島村博士をおいて外にはない。島村博士に焦点をあてた話題が，これまで記してきた医専時代の歩みを象徴的に再現することになるのだから，第3章を結ぶ一項としてこの寿像除幕式は，まことに時宜をえたものといえよう。



精神病舎(1912年・明治45年)

島村俊一氏が明治27年、3年間のドイツ留学を終えて帰朝して直ちに本校に赴任し、神経精神科教室を創設した当時は、京都府のみならず、関西地方にはまともな精神病舎、収容所はなく、ただ洛東永観堂の畔の京都癡狂院と洛北岩倉村の狂者預り所があったのみで、それも甚だ微々たるもので何ら設備にみるべきものなく、とくに後者の名前からも察せられるように、座敷牢的なものに患者を預りおくのみ、治療の面は全く顧みられなかった。帰朝早々の氏は、生々しい西欧の新知識を実行に移し、教室の整備に努めると共に時の猪子校長の協力をえて、明治30年模範的精神病舎の建設を遂げたのだが、これは実に本邦の医学校における精神病棟設置の嚆矢であった。島村氏の名声は東に呉秀三、西に島村俊一といわれ関西医界はいうに及ばず本邦医壇斯学界の泰斗として広く景仰の的であったという。精神科教室についていっても、大阪高等医学校は4年後の明治31年、愛知では13年後の明治40年創設であるから、本校の精神科の伝統はぬきんでている。京都医科大学でも当初は島村氏の引き抜きが成功しなかったためか精神科の設置はよほど遅れて明治36年であり、病棟の建築は更に後であるから、それまでは専ら本院の一手販売といった有様であった。従って大学設立後経営見通しが立ち兼ねたとき、一部では本院を精神病院としてやってゆこうという意見もあったくらいで、療病院経理はすでに述べたように入院患者の殆んど半数を占める精神科の収入によって支えられていたともいえる。「病院ハ猪子トイフ人ガ院長ヲセラレタ時ニハ殆ンド外科病院ノ如クデアリ、又島村トイフ人ガ院長ヲシテ居ラレル時ニハ殆ンド精神病院ノ如クデアリマシタ」と後年の府会議事録にもあるが、次ページの表を見ればあながちオーバな言葉でもなく、京大新設後の当療病院は島村氏によって切り抜けてきたのである。

猪子校長のあとを受けた加門校長も京大に去ったあと、明治33年5月、「スープのだしがら」(医界時報)とまでいわれ、がたがたの空家同然の医学校校長の職に就いた島村氏は、一方で院長兼精神科部長として病院収入を支えつつ、外には当事者を説得して本校廃止の案を捨てしめ、内には英材を選任して教諭陣容の立て直しに東奔西走する。工藤、望月、赤座、永井、伊藤、池田、秋元の各教諭は、あるいは熊本から鹿児島から、あるいは仙台から、いずれも島村校長の尽力によって本校に招かれ、こうして専門学校誕生とその後の発展の布石は着々と敷かれた。本校を危急より救い、その存立の基礎を確立した島村氏の功績は、以来本校中興の祖と称される所以である。

専門学校発足後は旧来の設備が日進月歩の医育機関として頗る欠くる所多きを憂い、独立採算のなかで校院舎の殆んど全部の新改築と内部諸般の設備充実を企画し、10年余の歳月と40万に及ぶ巨費をかけてこれをなすとげ(明治43年、病のため校長を退いたが、その時この計画はすべてでき上っていた)、また海外留学規定を定め 俊才の誘掖の法を立てられたのも、島村校長の熟慮断行、理のある所衆論の前に立って自己の所信を枉げず貫徹して止まぬ人となりのしからしめる所であった。校長兼院長としての多忙な内外の雑務の一方では着々と研究業績を積み上げ、明治39年8月率先して論文提出、医学博士の学位を受け、後進に見事な

患者累計(明治三十六年一月~五月)		入院・外来患者数の推移														
計	入院	外来	内科		外科		眼科	産婦人科	神経精神科	皮膚耳鼻科	計					
八六二	四、四三	二、八三	二、四〇	一、〇六	五〇	一四五	一六九	五六	七六六	二八九	一一三	三〇	三五	三七一	五	八一三
	二、八三	二、六六	一一〇	六三	五五	四四	七三	四四	三八九	一一一	一一六	〇	四一	二九三	二	六三七
	一、六四	九元	一五八	九二	一二七	七八	一一五	三三	六〇三	一六〇	七四	三	三七	二七七	一五	五六六
	一、六四	九元	一九六	八八	九二	九〇	一一七	七一	六五四	一九八	六四	四	八〇	二五三	四	六〇三
	八六二	六、五五	一三五	九三	一二七	一一七	一一八	四六	六三六	一四六	一五一	三六	七六	二九七	八	七一四

外来の部
九月の一日より四月までの延人員を最近四ヶ年で比較した
(除学用患者)

京都医事保険誌明治三十八年九月 百三十八号

(校友会誌より)

範を垂れたところにも氏の偉大さをみる。43年3月、病魔の襲う所となって校長兼院長の重職を退くが、在職10年のこの期間は断崖の淵から辛うじて這い上り、やがて京大を向うにまわして遜色なき一黄金時代を築き上げたドラマティックな時期であった。一人重荷を双肩に負ってきた積年の努力奮闘が氏に課した犠牲もまた大きかったのだろう。不惑を越えてまもないうちに病床に伏し、出勤ままならず、完成に近づく専門学校・療病院の新威容を病床から眺めねばならなかった氏の胸中は、あるいは存分に腕を振ったあとの静かな満足であったか、それともでき上った舞台に自ら登場できぬ心残りのいらだちであったか、あるいはまた外観の完成に設備内容の未だ追いつかざるを憂うひそかな歎きだったか。

島村氏の校長院長辞任と共に精神科の斜陽凋衰が始まるのも、本校の常にたどるパターンの一つである。専門学校・療病院を支えるのは患者を引きつける強力な個人の才腕であって、この意味で英才の人選が常に至上命令となっていた。これは特に本校のみに限ったことではないにしても、事あるごとに府議会で臨床教諭の腕が病院収入と対比されて論議されるのは、独立採算制を堅持した本校にとっての宿命でもあった。病院収入のみによる独立採算制ではいかんとも学校発展に障害ありと、この撤廃運動は以前から行なわれているが、大正6年になっても府会記録には一般会計移管は至難なりとの府学務課長の答弁がみえる。

精神科の斜陽にはもう一つ別の要素が加わっている。岩倉病院新築落成(明治42年)、川越病院(旧京都癲狂院)移転拡充(大正2年)、船岡病院新築移転(大正2年)と続々市内精神病院が充実して行ったことである。しかし、こうした精神医療の京都における充実は、実に島村博士の長年の校・院内外の努力の一つの結果でもあって、教室で教えをうけた門下生は100名をこえ、岩倉病院長土屋栄吉(明治32年卒)、川越病院長川越直三郎(明治32年卒)、船岡病院長池田茂(明治28年卒)共に博士の高弟であった。有能な医師を養成して市中に出すことで病院は苦しくなるというジレンマがここに象徴されているが、これを乗り越えることで医専・

	男	女	計
大学病院	22	13	35
府立病院	34	13	47
川越病院	52	25	77
船岡病院	52	17	69
岩倉病院	83	33	116

大正5年2月(京都医事保険誌)

	48	大正4年	84
明治37年	48		84
38	57	5	87
39	62	6	71
40	76	7	91
41	99	8	92
42	98	9	85+10
43	108	10	59+26
44	110	11	80+17+3
45	107	12	97+1+11+6+3
大正2	102	13	86+23+5
3	105		

て望月院長を背後から助け、また直接診療に携る体力すでになく出勤常ならずといえども、精神科部長としての職は大正5年12月まで続け、大正期に訪れた二度目の危機にもつねに背後から助言を与え、医専・療病院の道を誤らせなかった。これまた博士の本校中興の祖たる名を欺むかなかった所以であろう。

大正6年11月11日の寿像除幕式には博士自身は病中のために臨席できなかったが、その高德と多年の功績を慕って来会者陸続とつめかけ京都大学より伊藤学長、松浦病院長、加門、平井、高山などかつての同僚、加屋府医師会会頭、森田代議士、新田貴族院議員、堀田府会議長など三百余、それに学生一同寿像前に参集して盛大に行なわれている。功績といわれるもののすべてを前校長の余沢と同僚諸氏の協力に帰しながら「常に変らざる愛校の赤心という讃辞のみはあえて甘受する」と病床から謝辞を伝えた島村博士はまたいう。「病褥に親しみつつ夢寐にも願う所は本校の隆昌である」と。除幕式に続いて盛大に行なわれた宴会、余興の数々に談じ興ずる同窓生たちに、寿像の垂れる無言の教訓と愛校の赤心は深く肝に銘じられたはずである。

島村博士はその後も闘病生活を送り、1923年(大正12年)3月逝去。時に齢63歳。しかし、その生涯を捧げた本校が1921年(大正10年)大学昇格をはたし大きく羽ばたくのを見ることができた。さぞや本望であったと思われる。

島村博士寿像除幕式をもって医学専門学校時代の通史の筆を措く。このあと大正8年より10年までは大学昇格運動の実行期、いわば専門学校脱皮の時期、大学への助走期であって、これは次章にゆずる。

(山本 尤)

